

西行の本歌取り

西畑実

はじめに

西行法師の作品に本歌取りの歌が少いことは、つとに指摘せられている（小島吉雄博士『新古今和歌集の研究』）。それは、西行の生涯と本歌取りがもつとも盛んに行われるようになった正治・建仁の比（『愚問賢注』）との間に多少のずれがあること、西行自身中央歌壇の傍觀者的存在であつたこと（交渉があつたとしても、歌界との繋りは非常に稀薄であつたといわれている）、また、その歌風がもともと自然発生的なものであつたこと（安田章生博士『藤原定家の研究』）に基因しているにせよ、ともかく本歌取りの作品を残していることは、歌風との関連においてじゆうぶん考察の対象となり得るであろう。この小論においては、その取り方の特色を明らかにするとともに、それが本歌取りの流れにおいていかなる位置を占めているかに及びたいと思う。それには、まず、本歌取りなるものの範圍を明確にしておくことが必要となる。

1 本歌取りの分類

本歌取りについては、たとえば、「和歌において、それ以前によまれた歌を素材にとり入れて、新しく作歌することをいう」（『日本文学大辞典』）、「古歌の一句もしくは数句を意識して自分の歌に取り用い、表現効果の複雑化をねらう修辭法」（『和歌文学大辞典』）、「従来の和歌から材料を得てくるのをいうのであるが、ど

の程度まで採るかというと一定しない。たゞ語彙だけを取つた場合、素材の大部分を用いたものもある。そうして単に語彙だけよりも素材をとり入れたものを本歌取という場合が多い」(久松潜一博士『新古今集の新しい解釈』)と説かれているように、その定義のしかたにおけるニュアンスは微妙に異なつてはいるけれども、先行作品を意識し、それによつたものをいちおう本歌取りと考えてよさそうである。しかし、一般的にいって、当時の作品は古歌に見える詞の範囲内で詠まれているから、本歌取りの歌か否かの判定を下すことはかならずしも容易なことではない。さらに、それは、心と言葉との問題と絡みあつて、きわめて複雑な様相を呈しているのである。こういうわけで、本歌の取り方はさまざまな分類が可能であるが、まず『八雲御抄』においては次のように説かれている。

この中に二つのやうあり。一つには詞をとりて心をかへ、一つには心ながらとりて物をかへたるもあり。詞をとりて風情をかへたるはよし。風情をとることは最も見苦し。

この場合、「心」は「風情」と同意に用いられているようであるが、素材としての言葉が、新しく詠まれた作品において、いかに文学的形象を遂げているかという考え方に立つ分類のように思われる。また、『竹園抄』には、

本歌をとるに四のやうあり。一には言葉を一とつにして心をかへ、二には心を一とつにして詞をかへ、三には本歌の上下の句をうちかへしてとる。四に本歌の大意をとるなり。

というふうな、心と言葉との関係という基本的な問題に加えて、本歌の語句をいかなる位置に置くかという、より技術的な面をも取り挙げているが、それだけ深く実作上の体験が投影しているということになる。さらに、『井蛙抄』になると、

(一) 古歌の詞をうつつして上下におきてあらぬことをよめり。

(二) 本歌にかひそひてよめり。

(三) 本歌の心にすがりて風情を建立したる歌、本歌に贈答したるすがたなど、ふるくいへるものすがたの

西行の本歌取り

(三) 本歌の心にすかりて風情を建立したる歌

本歌に贈答したる歌

たぐひなり。

(四) 本歌の心になりかへりてしかもそれにまとはれずして妙なる心をよめる歌、これは拾遺愚草につねにみゆるところなり。

(五) 本歌のたゞ一ふしをとれる歌。

(六) 本歌二首をもて詠める歌。

のごとくに、より作歌経験に密着した分類が施されている。これは、『井蛙抄』ときわめて近い関係にあるといわれる『愚問賢注』にも、左のように見えているのである。

(イ) 本歌の詞をあらぬものにとりなして上下におけり。

(ロ) 本歌の心をととりて、風情をかへたる歌。

(ハ) 本歌に贈答したる体。

(ニ) 本歌の心になりかへりて、しかも本歌をへつらはずして、あたらしき心をよめる体。

(ホ) たゞ詞一を取りたる歌。

『群書解題』によれば、『井蛙抄』よりも『愚問賢注』の方が遅れて成立したらしく、また、後者とはほぼ同様な記述が、『近來風体』の本歌取りの項にも出ているから、ここでは、主として『愚問賢注』の分類に即しつつ、本歌取りの型を考察してゆきたいと思う。^(金上)

まず、(イ)の本歌の詞を上下に置く手法は、「註とおぼゆる詞二ばかりとりて今の歌の上下句にわかちおくべきにや」(『毎月抄』)という意見に胚胎しているのであるが(本歌の言葉の位置について、定家がいかに関心を払っていたかは、「大方歌のならひ古人の歌を願ふべし。下句より続けて、五文字をはてに置くこと身にはじめて申し出でたる事なり」と『先達物語』に言っているとおりである)、それがごく普通のこととなつたらしいことは、「いかに本歌の文字、置所をたがふべし。仮令、初の五文字をば才三句に置くべし」(『和歌庭訓』)、「まづ古歌の詞を上下して、おきあらたむる事本体なり」(『和歌用意条々』)、「本歌をとるに、上句をば下

句におき、下句をば上句にやりてよむ事は、つねのことなり」（『徹書記物語』）の言に徴しても明らかである。けれども、それは、ひつきよう「新しき歌にききなされぬところ」（『近代秀歌』）から免れるひとつの手段（そうしても、等類を避けられない場合ももちろんあるが）に過ぎないように思われるから、本歌取りの型の一つにして数える要もないのではあるまいか。『井蛙抄』にこの例歌として掲げられている「名とり川春の日かずはあらはれて花にぞしづむせぜのむれ木」（本歌「名とり河せぜのむれ木あらはればいかにせんとかあひみそめけん」）にしても、じつは、「本歌に贈答したる体」なのである。

つぎに、(四)について述べると、ともに「本歌の心をとる」、もしくは「本歌の心になりかへ」る点において、傾向を同じくしている——『竹園抄』にいう「本歌の大意をとる」に相当する。そういう意味で、この取り方は「包摂型」といつてもよからう——が、一方は「風情をかへ」るのに、他方は「本歌をへつらはずして、あたらしき心をよ」むところに差異が認められる。前者は、本歌の心をそのままうけついでにはいるが、風情・趣向を異にしているのに対し、後者は、「本歌の心の世界に没入し、全くその世界の人となり切つて、その世界の中で自由に新しき構想を行つている」（石田吉貞博士『藤原定家の研究』）と説かれていたり、本歌の心の延長のうえに新しい美的世界を構築したものである。前の取り方を転換型だとすれば、後者のそれは延長型だと考えてもさしつかえないのではあるまいか。

それでは、(イ)とはいかなる取り方であろうか。本歌は「贈歌」という意味にも用いられており（『和歌童蒙抄』『和歌色葉』）、本歌取りの作品のなかには返歌の型を踏んでいるのも見られる（返し型の型については『和歌色葉』『八雲御抄』に説明がある）。しかし、ふつう贈答型といわれるのは、「古歌に贈答したる体あるべし。有りといふに無しといひ、見るといふに見ずといへる是なり」（『和歌用意条々』、「その歌にはさやうに読みたれども、私はさも思はず、かやうにこそ思へなど様によみたるを古歌に乗るとは云ふなり」（『了俊一子伝』）のように、本歌の心をうらうえにもしくは否定的に取りなしたものをいうようである。前者を逆想型、後者を反戻型と呼ぶことにしたいと思う。たとえば、「立田川あらしや嶺によわるらむわたらぬ水も錦絶え

西行の本歌取り

けり」(本歌「立田川もみぢ乱れて流るめり渡らば錦中や絶えなむ」)は逆理想と考えられるし、「憂きことはいはほの中も聞ゆなりいかなる道もありがたの世や」(本歌「いかならんいはほのなかにすまばかは世のうきことのきこえこざらむ」)は反辰型といえるであろう。

(例)は、古歌の一句ないしは二句を取つて自分の歌に用いた場合をさすものと思われる。それには、「朝日かげにほへる山のさくら花つれなく消えぬ雪かとぞ見る」(本歌「朝日かげにほへる山に照る月のあかざる君を山越しにおきて」)のごとく、単に本歌の辞句を借用したに過ぎない場合と、「秋をへて昔はとほき大空にわが身ひとつはもとの月影」(本歌「月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身一つはもとの身にして」)のように、古歌の心をその一句ないしは二句にこめて撰取する場合とがある。だが、前者は、言葉もしくは言葉の続けがらを古歌に做つたものであり、また、後者は、しよせん古歌の大意を取つてことになるから、(例)を特立せしめるだけの積極的な理由は見出しにくいように思われる。

いつたい、古歌から語彙だけをとる場合、「本歌の言葉をあまりに多くとる事はあるまじきにて候」(『毎月抄』)といわれているにもかかわらず、本歌に近似した作品はけつして少くないのである。

住のえの松に白雪ふるからに声よわりぬる沖つ潮かぜ

(本歌) 住のえの松を秋風吹くからに声うちそふる沖つしらなみ

いたづらに行きてぞ来ぬるさくらばなさかぬくもるも見まくほしさに

(本歌) いたづらに行きては来ぬるものゆゑに見まくほしさにいぎなはれつつ

のごときは、本歌の格調と外態を模倣しているにとどまり、その心は一首の気分醸成にほとんど与つていないといえよう。しかも、いづれも「五句之中及三三句」者頗過分無珍氣」(『詠歌大概』)、「二句之上三・四字免之」(同)の制禁を破つている。これらを考えあわせるとき、このような取り方を擬辰型と呼んでもさしつかえないように思う。

さらに、いま一つ単に古歌を引用しているに過ぎないという取り方が存在する。これは、

うぐひすの笠にぬふてふ梅の花折りてかざむ老いかくるやと
 ものかはと君がいひけむ鳥の音の今朝しもなか悲しかるらん

などのように、伝聞の意をあらわす語を伴うことが多い。この取り方も本歌の大意を取るという点において、包撰型と見られなくはないけれども、それが本歌の心を自己の心情に引きつけて取る傾向が強いのに対して、これは古歌を他者の言葉として自身のそれを修飾すべく引いているのである。こういう技法に引用型という名称を与えることにしよう。

以上において述べたところを整理すれば、本歌取りの型は、基本的なものとして、

包撰型

贈答型

擬態型

引用型

が挙げられる。これは、さらに包撰型を分けて延長型と転換型に、贈答型を分けて逆想型と反戻型とにすることもできる。しかし、本歌取りの本質を表現効果の複雑化ないしは、作品の象徴的效果を高めるための技法と考えるならば、先行作品の言葉もしくは形態を借用したに過ぎない——知識上の遊戯的面白さだけに過ぎない（『和歌文学大辞典』）——擬態型は、本歌取りの例としてはあまり重く見ない方がいように思われる。また、引用型の場合も、古歌の知識を欠くときは十分な理解が困難であるにしても、包撰型・贈答型に比して多少次元の異った点が認められよう。作者の技倆がもつともよく發揮できるのは、前二者においてなのである。本歌取りの型をこのように考えるとき、西行の取り方にはいかなる特色が見られるであろうか。

2 西行の本歌取りの様相

「日本古典全書本」の『山家集』によれば、西行の本歌取りの作品は、約五十首見出されるが、総歌数二千八

西行の本歌取り

十八首（同集に収められている二千二百四十八首から「存疑・誤伝西行和歌」はもちろん、重出歌・連歌および他人の作を除いたもの）に対する比率を求めると、約二・四パーセントという数値が得られる。当代の代表的歌人たちの百分比が概して一〇パーセントを超えているのに比して、西行のそれが、はなはだしく低率であることは明らかで、まったく小島博士のご指摘どおりということになる。

西行の作品の発想形式は、窪田章一郎博士によれば、(一)題詠、(二)対話（贈答）、(三)独詠、(四)代作に分類されているが（『西行の研究』）、題詠と独詠とはたがいに涉りあう点があるといわれるし、かつ、代作も題詠もしくは対話（贈答）にかかわっているのです、ここでは、その点を考慮して、少し大握みな嫌いはあるけれども、(一)題詠と(二)非題詠（機会詩）とに分けて、彼の本歌取りの歌を見て行くことにしたいと思います。それについて調査した結果は、次のようになる（歌番号は「日本古典全書本」の『山家集』のそれである）。

(一) 題 詠

二〇九・二一四・三〇六・三一五・六一八・六三一・六三二・六六六・六七九・七一四・七三九・七六四・七七七・九八一・九九二・一三〇六・一三三二・一三三八・一三八〇・一三八六・一四二七・一五九二・一五九三・一六九〇・一七〇七・一九四八・二〇一三・二〇二七・二〇九八・二一二七・二二五七

(二) 非題詠

一一四・三七五・四四八・四五〇・五八二・八一六・八一七・八四三・八九〇・九九六・一一三三（重出）
一一九二五）・一一三四・一一六七・一一八三・一二〇一・一二一四・一二一五・一三〇八・二二一四

これによると、西行の本歌取りにおいては、題詠と非題詠との間にさほどいちじるしい径庭の存しないことがわかる。このことは、本歌取りがもっぱら題詠を中心として行われていた新古今時代の状況とはかなり相違していることを物語つていよう。こういう思いは、西行の題詠に生活体験に即した独自の歌が少くないという事態を想起するとき、ますます深くなるのである。

それでは、いかなる歌集の作品を本歌にしているかを調べてみると、五十首のうち、『古今集』の歌によるも

のが十八首、『拾遺集』から十首、以下『後拾遺集』六首、『金葉集』五首、『新古今集』所収の古歌によるもの四首、『詞華集』三首、『古今和歌六帖』、催馬楽それぞれ二首となる（一首の歌が二回以上利用せられている場合もあるから、本歌そのものの数は四十四首に減少することになるわけである）。

次に、いかなる歌が二回以上取られているかをみると、

いとせめてこひしき時はむばたまの夜の衣をかへしてぞきる（『古今集』）

あまのかるもにすむむしの我からとねをこそなかくめ世をばうらみじ（同）

きみをおきてあだし心をわがもたばすゑのまつ山浪もこえなん（同）

末の露もとのや雲世の中のおくれさきだつためしなるらむ（『新古今集』）

和泉なる信太の森の楠の千枝にわかれて物をこそ思へ（『古今和歌六帖』）

となるが、このうち、「あまのかる」の歌が、『西行上人談抄』に「殊には本とすべき歌」として掲げられていることは注意に価する（一回しか取られていない作品で、『西行上人談抄』に見えているのは、「殊に本とすべき歌」―四〇六・七四七・九三八（『古今集』）・二二四（『拾遺集』）、「古今の外にもよき歌」―三九〇（『後拾遺集』）、「心につかむ歌」―八五三（『古今集』）、「おもしろき歌」―一〇六四（『後拾遺集』）、「こゑよみの詞優なる歌」―五三一（『拾遺集』）がある）。このように、西行の嗜好は、門弟に語つた作品を本歌にしている場合はもちろん、そうでない場合においても、機智的な趣向を凝らした歌にあるのではなく、現実体験に裏打ちされながらしみじみと優雅な情趣を湛えた作品にあつたようである。本歌の傾向が西行の作風に近いものであることは、彼が取り用いている歌そのものが、四季歌九首、恋歌十二首、薨旅歌三首、哀傷歌四首、神祇歌一首、雑歌十三首というぐあいに、雑歌的傾向を示しているということからも窺知できるであろう。しかし、本歌取りにおける西行の特色を知るためには、いかなる歌を利用しているかということよりも、いかに取り入れているかという面に視点を移動しなければならぬ。

西行の本歌取り

3 本歌取りの西行的特色

題詠における本歌取りの例には、

- (イ) われはただかへさでをきむきよ衣きてねしことをおもひいでつつ
 (ロ) 色に出でていつより物はおもふぞととふ人あらばいかがこたへむ
 (ハ) めぐりあはで雲のよそにはなりぬとも月になれゆくむつび忘るな

などが挙げられるが、(イ)が『古今集』の「いとせめてこひしき時はむばたまの夜の衣をかへしてぞきる」、(ロ)が『拾遺集』の「忍ぶれど色に出でてけり我が恋はものや思ふと人のとふまで」、(ハ)も同じく『拾遺集』の「忘るなよほどは雲井になりぬとも空行く月のめぐりあふまで」からの本歌取りであることはいうまでもないとして、注意すべきは、かへしてぞきる↓かへさでをきむ、人のとふまで↓とふ人あらば、めぐりあふまで↓めぐりあはというふうな、本歌の心をうちかへして歌り用いていることである。(注4)もつとも、題詠においても、「月まつといひなされつるよひのまの心のいろをそでにみえぬる」のごとき包摂型や、「川かぜにちどりなきけむふゆのよはわがおもひにてありけるものを」のような引用型も見られなくはないけれども、かかる贈答型にはとても及ばない観がある。

今度は、非題詠における本歌取りについて考察することにしよう。

ぬるともとかげをたのみておもひけむ人のあとふむけふにもあるかな

これは、「桜がり雨はふりきぬおなじくはぬるとも花の蔭にかくれむ」(『拾遺集』)に拠るものであるが、西行の歌の制作事情(この歌には「雨のふりけるに、花のしたにて車たててながめける人に」という詞書がある)と、依拠した作品の内容とが深くかかわりあっていることは注目ししよう。つまり、西行はその場の雰囲気にかきわしいこの歌を引いて挨拶としたので、この取り方が引用型であることはもちろんである。それとともに、非題詠における本歌取りの作品の大半は羈旅の歌であることもまた、われわれの興味を惹く。

粉河・吹上遊覧(八一六・八一七)―能因法師(『金葉集』六六五)

大峰入（九九九・一二〇二）―僧正行尊（『金葉集』―五六八・五五六）
 初度陸奥の旅（二二四・二二五）―能因法師（『後拾遺集』―五一八）・橘季通（『後拾遺集』―一〇四二）

天王寺参詣（二一八三）―在原業平（『古今集』―四一八）

住吉社参詣（一三〇八）―源経信（『後拾遺集』―一〇六四）

春日社参詣（四四八）―安部仲麻呂（『古今集』―四〇六）

良暹旧居参観（一一三三、重出・一九二五）―良暹法師（『詞華集』―三六六）

閑院殿参観（一一三四）―赤染衛門（『後拾遺集』―一〇五九）

伊勢閑居（二二一四）―喜撰法師（『古今集』―九八三）

このように、名所・旧跡における詠歌は、先行作品が発想の契機になっている場合が多いのであり、また、その利用の仕方も、「おもへただくれぬとききし鐘の音は都にてだにかなしかりしを」の包摂型、「かたそぎのゆきあはぬまよりもる月やさえてみ袖の霜に置くらむ」の贈答型もとより見られるところであるが、大部分を占めているのは、

露もらぬいはやもそではぬれけりときかずはいかにあやしからまし

いまだにもかかりといひしだぎつせのそのをりまでは昔なりけむ

あくがれしあまのかはらと聞くからに昔の波の袖にかかれる

のような引用型なのである。

以上で、西行法師の本歌取りは、題詠においては贈答型、非題詠においては引用型が中心になっていることがわかる。既述のごとく、本歌取りの様式のなかで、贈答型と包摂型とがもつとも重要であるが、前者は本歌の趣向をいかに受けとめているかというところに知的興味がかかっているように考えられるから、それがただちに本歌取りの作品の象徴的効果を高めることに繋がるとはいいいくいにはあるまいか。

西行の本歌取り

してみると、西行の本歌取りは、非題詠の場合のもとよりのこと、題詠においても、どちらかといえ、先行作品の存在を意識して取り用いた程度に過ぎず、情緒の複雑化ないしは象徴的效果にそれほど与つていないといふことになるであろう。

ところで、『新古今集』における本歌取りは、奇数句切れや体言止めなどの表現技法と絡みあつて、新しく詠まれた作品の象徴的效果を促進するといわれている。だが、西行の場合は、本歌取りが他の技法と有機的に用いられているのは、初句切れ一首、三句切れ四首、体言止め四首、三句切れ・体言止め三首に過ぎないのである。西行の本歌取りがきわめてすなおで単純なことは、この事実からも窺知できるのであるまいか。

西行の歌が即興的性格ないしは実情的性格を強くおびていること、ならびに表現上の特色として自在性が認められることは、安田博士が既に説いておられるところである。こういう西行の発想法もしくは表現法が本歌取りの技法に投影していることは、今までの調査から考えて、確かだということができよう。西行は、作品における抒情性の浸透度において、歌よみと称せられているが、本歌を取る際にも、「いひたきまにいひ」（『八雲御抄』）、「心にまかせてよみ」（『美濃の家苞』）すてようとするとところに歌よみの性格が認められる（本歌取りに対する無造作な態度は、『御裳濯河歌合』十番右の「ふりさけし人の心ぞしられぬるこよひみかきの月をながめて」に対して、俊成が「ふりさけしといへる初の句やいかにぞ聞ゆらん」と評している事実からも窺えよう）。

本歌取りにおいても、歌よみ、歌作りの別が考えられることは、『耕雲口伝』に、

本歌をとるにおきて、歌作りといはるる人あり、心ききなる歌人、むかしの歌をとかくあてがひつくり出し
たれば、おのづからよき歌に似たれども、まことには性情を吟味せぬによりて、面影優にすがた妙なる事
さらになきなり。

と見えているごとくである。「むかしの歌をとかくあてがひつくり出」すことは、構成的な手法であり、古歌の持つている「性情を吟味」したうえ、現実体験に援用して新しい作品を詠もうとする実情主義的方法とは明らか

に違うのである。

新古今歌人の本歌取りは、一般的に、機会詩として捉えられてはならず、現実的体験とはほとんど無関係の先行作品が、新しく生み出されるべき作品の母胎となつてゐる。ところが、西行の場合は、あくまでも発想の根本に実情ないしは感動というものがあり、本歌は、だいたいそれを彩るものとしてしか取りあげられていないように、そこに、本歌取りにおける歌作りと歌よみとの差異を認めることができるのではあるまいか。前者は定家を最大一とし、後者は西行によつて代表される。両者の歌風の違いは、本歌の取り方にも歴然と反映して、深い興趣をおぼえしめるのである。それにしても、西行の技法は、平安以来の本歌取りの流れをいかに受けとめているのであろうか。

4 本歌取りの西行的意義

本歌取りの作品は、定義のしかた如何によつては、すでに早く『万葉集』において見出される。そこには、「意識して古歌を作りかえて自分の今の心境を表わした歌」（『和歌文学大辞典』）もあるけれども、多くは単に古歌の慣用的表現に倣つただけのものであつて、まず本格的な本歌取りの要件をそなえた作品が詠まれるようになるのは、『古今集』からだといわれている。

いま、八代集（流布本による）について行つた本歌取りの調査では、次のような結果が得られた。^(注5)

歌集	発想形式	
	題 詠	非 題 詠
古 今 集	三 首	三 首
後 撰 集	七 首	二〇 首
拾 遺 集	八 首	八 首

西行の本歌取り

この表によると、『古今集』ないし『後拾遺集』における本歌取りは、非題詠の作品に多く、『金葉集』からあとの勅撰集では、題詠に多いということがわかる。題詠は、屏風歌・歌合などの流行につれて、時代の経過とともに非常に盛んに行われるようになるのであり、それは、必然的に古代和歌的な発想法の上に変化を惹きおこすに至る。このように、日本詩歌史の上に大きな転換期が到来した時期——和歌における中世的性格の萌芽期——と、即興的な作品よりも題詠の方に本歌取りがより多く試みられるようになった時期——本歌取りにおける手法形成期——とが重なっていることは、本歌取りの流れを辿る上に見逃せぬ事実であろう。

また、『後撰集』以後において本歌取りの作品が増加していることは、原田芳起教授が、「時期的に言っても、散文における引き歌が活潑になりはじめた宇津保物語語期が、本歌のある和歌が急に多くなつた時期であつたように見うけられる」と説かれておられるとおりのことである。本歌取りは、こうした会話・消息文における引き歌ないしは先行作品に和する詠法によつてはぐくまれたと考えられるが、それが古歌の取り方のある型に嵌める方向に働いたことも否定できない。ここに、『古今集』から『千載集』までの勅撰集における本歌取りの型を調べてみると(括弧でくくつたのは題詠ならぬ作品のそれである)、次のようになる。

- 古今集 贈答型2 (1) (転換型1) 引用型1 (1)
 後撰集 贈答型5 (5) 転換型1 (4) (延長型6) 引用型1 (5)

後拾遺集	一首	二四首
金葉集	五首	二首
詞華集	三首	二首
千載集	三二首	五首
新古今集	二四一首	二九首

拾遺集	贈答型2(1)	轉換型4(5)	延長型2(1)	(引用型1)
後拾遺集	(贈答型6)	轉換型1(10)	(延長型4)	引用型4
金葉集	贈答型2(2)	轉換型3		
詞華集	轉換型3	(延長型1)	(引用型1)	
千載集	贈答型15(2)	轉換型7(2)	延長型6(1)	引用型4

全体を通じて、本歌取りの型は、贈答型・轉換型が多いが、この傾向は、本歌取りに対する意識がしだいにつきりしてくる平安時代中期以降においても、引き続き認められはする。

およそ、贈答型もしくは轉換型の特徴は、本歌の心を表裏にたがえ、あるいは風情をひきかえてよむところにあることは、前に述べたとおりである。本歌を取るといつても、単なる模倣剽窃にとどまるものが少くなかつたらしいことは、当時の歌論書の記事からも推されるが、「歌をよむに古き歌によみにせ」(『俊頼髓』)る難から免れるには、かような取り方をするのが捷徑であることは容易に考えられるであろう。それは、効果からいって、情緒の複雑化というよりもむしろ趣向の目新しさを狙うものにはかならない。だから、本歌取りが作品の象徴的効果を高めるために積極的に取りあげられるようになると、これらの型は延長型にその地位を譲らざるを得なくなるのである。このような風潮が、平安時代末期から鎌倉時代初期にかけて、俊成の指導下にある歌壇をしいだいに覆うようになるのであるが、すでに考察したごとく、西行の本歌取りは贈答型と引用型とを主としたものであつた。それは、発想法において、古代和歌的性格を深く帯びていた西行にふさわしい取り方だといえる。しかし、本歌取りは、一方の限界として、構想・素材・情緒などを固定化するはたらきを持つ。「生得の歌人」(『後鳥羽院御口伝』)と称せられた西行に本歌取りが少いということは、かような事情からもうなづけるであろう。

注1 『近來風体』には、「本歌の言葉をとりにて、風情をあらぬ物にしなし、本歌のことを上下の句に置きかへたる、常の事なり。……又本歌の心をもとりにて、あらぬ様にとりなしたる歌もあり。……又本歌に贈答したる体あり。……又は本

西行の本歌取り

歌の心になりかへり、しかも本歌をへつらはでよむ体もあり。……又言葉ばかりをとりたる歌もつねの事なり」と見えている。

注2

本歌の取り方については、栗花落栄氏の「本歌取考」（「国語国文」昭和二十六年才八号）に負うところが多い。

注3

新古今時代の歌人たちの数値についていえば、たとえば、俊成卿女三十三%、藤原家隆二十四%、後鳥羽院二十%、藤原定家二十%以上（石田吉貞博士「藤原定家の研究」参照）、藤原良経十五%、宮内卿九・二%、藤原秀能八・四%、源通光七・三%のごとくである。

注4

なお例歌をあげておくと

春になればとてみどりにて雪の波こす末の松山

月すみし宿もむかしの宿ならで我身もあらぬわが身なりけり

とめ行きて主なき宿の梅ならば勅ならずとも折りてかへらむ

花さへに世を浮草になりけり散るを惜しめば誘ふ山水

注5

題詠か否かということは、かならずしも明確に判定しがたい場合もあるけれども、いちおう詞書に従うことにした。また、古歌を意識していたにもせよ、その詞を襲用しただけのように考えられるものは勘定に入れていない。なお、同じ勅撰集に含まれていても、本歌取りの作品には新旧があるので、その作者が初めて採られた集別に統計すべきであろうが、この表でもだいたいの傾向は掴めるであろう。

注6

「宇津保物語における引き歌―宇津保物語の言語と文体四―」（『平安文学研究』第三十七輯）

注7

こうした例としては、前者の場合、

文つかはしける女の母の、恋をしこひばといへりけるが、としごろへにければつかはしける

たねはあれどあふ事かたき岩の上のまつにて年をふるはかひなし（『後撰集』）

これが御かへりただ稲舟のと仰せられたりければ又御返し

いかにせむ我が身くだれる稲舟のしばしばかりの命たへずは（『拾遺集』）

物いひ渡るをとこの淵は瀬になどいへりける返事によめる

淵やきは瀬にはなりけるあすか川浅きを深くなす世なりせば（『後拾遺集』）

があり、後者には、

寛平御時ふるきうたたてまつれとおほせられければ、たつたがはもみぢばなるといふうたをかきて、そのお

なじ心をよめりける

み山よりおちくる水の色みてぞ秋はかぎりと思ひしりぬる（『古今集』）

寛平御時花のいろは霞にこめて見せずといふ心をよみて奉れとおほせられければ

やま風の花の香かどふふもとにははるのかすみぞほだしなりける（『後撰集』）

のごときが挙げられよう。